

基調講演－高校時代の人間形成－

公益財団法人さわやか福祉財団 理事長 堀田 力氏

堀田 こんにちは（拍手）、ありがとうございます。夏休み、お盆、オリンピック、そして何よりもこのすごい猛暑のなかという四重の障害を打ち破ってご参加いただいております皆さま方の教育に対する熱意に深い敬意を表したいと思います。教育の大専門家お揃いのなかで素人の私が申し上げるのは大変口幅ったいのでありますけれども、社会全体の立場ということでプレゼンテーションさせていただきます。見当外れのところをご容赦いただきたいと思います。

本日ご参加の先生方の担当しておられます生徒さん方は、午前中の報告にもあったと思いますが、素晴らしい人間的な成長を遂げておられ、個人としても、また社会のなかでも素晴らしい成果をあげられる、素晴らしい人生を送られる、そういった方々が育っておられるんだと思います。これから私が申しあげることが日本の若者の悪口になってしまいます。好ましくない点をまず申し上げていきますけれども、これは社会全体、先生方のご担当でない生徒の話であると受け取っていただきたいと思います。

日本の若者について－「青年の船」－

日本の若者が社会に出て社会人として言われているのは「自分でものを考えない。課題をまず見つけない。また見つけても積極的に取り組まない。指示待ちである」。これが多くの会社の経営者、あるいは役所の管理者等々がぼやくことであります。大体そういう人たちは部下のことをぼやくのが仕事でありますから、それほど気にすることはないのですけれども、ただ、海外のいろんな若者たちと比べてもやはりそういう特徴があるということになりますと、「うーん、これは社会人としてそれでいいのかな」という思いになるわけであります。

これも何年前でありますけれども、私の友人が「青年の船」というのにチューター役に駆り出された。7カ国からそのチューターが来ておったそうです。「青年の船」の参加者は14カ国。各国から英語ができるという基準で選ばれて14カ国、アフリカとかソ連とか中東からも参加していたそうですけれども、60日間、船でいろんな問題を各国の青年たちと討議する。

そういう船に参加したところが、船が出発して幾つかの分科会があって、各国の青年たちが地球上のいろんな問題、いろんなテーマについて議論する、そういう勉強会が進んだなかで、何日かしてそのチューターたち7名が集まって、それぞれのチューターから「どうして日本の青年は発言しないのだ。ものを言わないのだ。議論に参加しないのだ」ということを言われて、それが1人、2人の話じゃない。

どのチューターも同じことを言うので、その日本から参加した私の友人、これは朝日新聞の編集委員をやっていた男ですけれども、これが心配になって日本から参加した日本の青年たちを集めて、「君たちは発言しないそうだけれども、どうしてなのだ。英語だと、やはり苦手なのか」と聞いたら、「英語は苦手じゃない」。それは英語ができるという基準で選ばれて入っているので、英語はちゃんと喋れる。「じゃ、どうしてそのテーマについて発言しないのだ」と聞いた。それぞれ環境とか地球上のいろんな問題、平和とか難民問題とかいろいろな問題ですけれども、それぞれ違うテーマについて日本の青年たちが「その問題についての答えを知らないから発言できないのだ。こういうのが発言しない理由だ」として青年たちが言った。

「それは答えがある問題じゃないので、それぞれいろいろな考え方があり得るのだから、君らの考えていることを述べればいいので、君らはどう思うのだ。例えばこの問題、この問題」と聞いたところ、「どう思うかと聞かれても、答えがわからないから思うことを述べられない」という答えだった。

答えがない問題についてどう考えていくのかというその作業ができないということに、彼は新聞社か

ら来ておりますので、愕然としていろいろ回ってみたら、アフリカから来ている青年も、ロシアの青年も、中東の青年もどンドン喋るので、「どうすればいいか、最後まで結局うまく喋れるようにリードできなくて悔しい思いをした」といろいろ述べておりました。

日本の青年は、それでは発言もせず、ただ船に乗っておただけかといいますと、そうではありませんで、夜の懇親会でみんな太鼓を叩くとか、みんなで踊るとかとなりますと、一糸乱れず実に見事な調和をみせて団体の力を発揮する。そういう団体行動は素晴らしいのだけれども、個人個人としての考えをしっかりと述べられないというのは寂しいと嘆いておりました。

元在ヨーロッパの大使のお嬢さんの話

そういうことは、実は私の他の友人、私はしばらく外務省に出向してアメリカにある大使館で勤務していたものですから外務省に友人がいるのですが、ヨーロッパの大使で行っていた。そのお嬢さんが東京の進学率の非常に高いというのですか、偏差値がいいというのですかよくわかりませんが、評価の高い、よくできると言われている中学校で抜群の成績を取っているお嬢さんらしい。また非常に成績のいい彼女の友だちがいて、その中学を出て高校時代にヨーロッパに赴任しまして、娘さんはヨーロッパの学校に2年半ぐらい通って、それで日本に帰るということになった。

日本の帰るということになったので、その中学時代の親友、これも非常に頭のできる、もう東大確実に受かるとその当時から言われていた子なのだそうですが、それがヨーロッパに訪ねてきた。それで2年半ぶりに会っていろいろな話をして、そのヨーロッパへ行っている娘さんはいろんな問題、

「アフリカのこの問題についてどう思う?」「環境問題についてどう思う?」「経済の問題、これこれの問題についてどう思う?」と、いつもヨーロッパの高校で仲間たちと話し、議論しているいろんな問題について、それは関心の的ですから、日本から来た彼女の親友、中学時代からよくできる、高校でも成績抜群だと言われているその友だちにいろいろ聞いたのだけど、すべて答えられなかった。その問題についてやはりわからない、どう考えていいかわからない。これは少し前の話ですが、

それでそのヨーロッパで2年半高校へ行ったお嬢さんは愕然としまして、「ええーっ」と。この方は高校でも勉強がよくできて、東大へも確実に入ると言われているぐらいに勉強のよくできるお嬢さん。日本でよくできるお嬢さんが世界のこのいま切実な問題について何も関心もないし、考えも言えない。

「日本で優秀になった人はこうなのか。どんな問題についても答えられないような人間には私はなりたくない」。大変愕然として、そのお嬢さんは日本に帰って日本の高校に入って大学に行く予定だったので取りやめにして、「私はヨーロッパに残る」ということで残って向こうの高校・大学を出ているわけです。そういう話も聞いておりました。

「青年の船」の話等々と合わせまして、どういうふうにしていけばいいのかということのをいろいろと考えるところがありました。確かに指示待ちという、自分の考えがなくて指示されたことを上手にこなしていればいい。正解を見つけて正解をきちんと出せばそれでいいという風潮はそんな最近のここ10年、20年に始まった話じゃなくて、私がまだ検察庁におりまして幹部として決裁しておった頃から、もう既にそういう風潮がかなり出てきておりました。

ですから、いろんなことは知っている。答えはすぐ辿り着く。しかし、自分で考えることは不得意で指示を待つて動くことしかしないというタイプの優秀な人たち、そういうタイプに変わり始めたのはたぶん昭和でいえば50年、西暦でいえば70年代の中頃ぐらいいかな。日本が少子化に入った世代、それから一億総中流になり、高校、大学への進学率がぐっと上がった時代。その頃から受験競争も激しくなり、覚える方向に非常に重点が行き、それと少子化で親に大切にされて、あまり人と交わらずに育っている。

そういう背景と両方があってそういう傾向が出だしたのかなと感じております。

検察時代の話

実際、私が決裁官になりまして検察で事件の決裁をやるようになりましたが、これはたぶん昭和55年、80年代であります。それ以前というのは、検事というのは「自分の事件はこういうふうにしたい」。

「自分の教育はこういうふうにしたい。この子はこういうふうに育てたい」と同じでありまして、「この事件はこういうふうにしたい」。「起訴したい」とか「この事件は許して様子を見たい」とか「この事件は親に預ける」とか「少年院に入れる」とか、自分で徹底的に調べ、被疑者の特徴を掴んで処分を決めて、それで決裁を最後は受けに行くわけであります。

上司はそれを試すために、つまり、起訴するというのであれば、「証拠上間違いないのか、証拠はきちんち揃っているのか、許すというならば許して本当に再犯を犯さないのか」、そういう観点からいろいろ上司は確かめるわけであります。いろんな質問を受けても全部答えるだけの調べはしていつているし、あるいは答えられなくても上司が違う意見を言ったら、「もういっぺん自分できちんと調べ直して処分をしっかりと決めてくるから」というのが普通であったと私は思うのであります。

ところが私が決裁官になりました頃、というのはつまり70年代の中頃から80年代ぐらいは部下もそういうのが多かったのですが、だんだん若い検事が変わってまいりまして、おとなしいといいますが、すぐ引いてしまう。

例えば「この事件、起訴したい」と言ってくる。「じゃ、この点について証拠は揃っているの？」と言うと、もうその一言で「あっ、それじゃ不起訴にします」と、ころっと変わってしまう。こちらとしてはしっかり調べて自信をもって起訴したいと言っているかどうか、そこを試しているのに、上のほうで「ここはどうなの？」と聞かれるだけで、「あっ、上司はこれは起訴したくないのだ」と忖度してしまって、もうすぐ引いてしまう。「ちょっと待てよ」と言っても、「いや、じゃ、もうそれで処理します」と言って逃げていつてしまう。「これで検事か。本当に研修はどうなるとるんじゃ」と憤慨したものでありますけれども、そういう若い人たちが増えてきた。

女性検事はわりあいしっかりしておりまして、「いや、その点はこういうふうにやります」「ここはこうなっております」「いや、そうはおっしゃいますが」と結構自信もってやってくれるのですが、男の子といいますが、男性の検事、特に若い検事などはおとなしい。可愛すぎるのですね。

いちばん驚いたのは、決裁受けに来まして、まずその話がよくわからない。我々の頃は「まず結論を言って、理由を言って」と仕込まれたものであります。そういう訓練があまりできていないというか、あまり絞めると、すぐやめてしまうというのでどうしても。本当にすぐやめてしまうので、そこはしっかり仕込まれていない。話がよくわからない。何か「起訴するのকাশないのか。何罪なのか。殺人なのか傷害致死なのか過失致死なのか単なる事故なのか」の結論がわからないで、だらだらだらだと何かで悪いテレビ番組の解説・要約みたいな話が続きますので、報告がしっかりできない。

私の頃はそんな報告をしていると、記録をぶん投げられて「調べ直してこい！」と行って叱られたものですが、それができなくなっておりますので、我慢して聞いているのですが、いつまでたってもわからないので、「それで、君、起訴するの、しないの」と聞きましたら、「検事正はどちらだと思えますか」と新任検事に聞かれました。

「クイズ番組をやっているのではないのだから、起訴するのকাশないのか、自分の意見を言えよ」と思ったのであります。そこはやめられたら困りますので我慢で、「いや、私は君の言っているとおりでたら起訴するのが相当だと思うけど」と私の意見を言いましたら、その新任検事が「ピンポン」と

言いました（笑）。まあ、可愛いといえば可愛い、本当に可愛いのでありますけれども、いや、本当にこれで将来どうなるのかと。検察がああいう体たらくになったのもそういうことが積み重なったのか、本当に情けない次第でありますけれども、大体その頃から答え、正解だけを求めるという傾向が出てきておったように思います。

池部敦君の話

それをなんとかしなきゃいけない。自分で考える人間、自分で課題を見つけてやる人間になんとかしなきゃいけないなと考えてきておったのですが、これは2008年に出た、もう古いんですけども、池部敦君というのが朝日新書という朝日新聞の新書で『さらば「受験の国」』という本を書いております。

「高校生ニュージーランド留学記」という副題が付いております。

この池部敦君は3カ月ほどの交換留学か何かでニュージーランドの高校に日本から1年生のときに行ったそうではありますが、そこでニュージーランドの高校の教育と彼が受けてきた日本の教育の差に愕然といたします。

彼はここに書いているのですが、「日本の教育はまず教科書がある。そして学習はノートを取って記憶する」。極端にまとめていえば、「教科書、記憶、そしてその成果はテストである。これが日本の教育だ。ニュージーランドの教育は、まずテーマを自分たちで設定する。どういう問題について考えるかテーマ設定があつて、そして自分たちで行う調査とディベート。ノートと記憶でなくて調査とディベート。そしてテストでなくてレポート。典型的に極端にいえば、そういう差がある」。

で、断然そのニュージーランドの教育のほうが面白いし、ディスカッションし自分の身につくということを彼は発見いたします。それで3カ月で日本に帰る予定をやめて、ニュージーランドの高校を出まして、その後アメリカの大学に入っているようであります。いま日本の教育も変わりつつはありますけれども、やはり基本的に、極端にいえばそういう教科書・ノート・記憶・テストという流れで来ている。そういうことが指摘されております。

この池部君の言うとおりでであると、やはり答えを求めて覚える、そしてテストで正解を言うということでもありますから、積極的に自分で課題を見つけ出して、その問題を解決すべく調べて積極的に取り組んで、そしてそれが正しいか他の仲間と議論して、そしてその成果をまとめる。そういう社会に出れば当然しなきゃいけない、そこの訓練ができていないということになってしまう。

実際に社会に出ますと、これは公務員になってもそうですし、何になっても同じだと思うのですけれども、そんな決められたマニュアルにあるような問題、仕事のやり方ですべて通るような職業はほとんどない。よほど単純な機械的作業以外は、いつどんな問題が出てくるかわからない。大体、顧客が千差万別であります。一人ひとり違う。公務員も顧客がおります。社会が動いている。その問題に対応しなきゃいけない。新しい問題が発生したときに、その問題をどう捉えて、どう解決するのか、それを自分で考えるしかない。そしてみんなで協力し合つて協議しながら答えを出して対応していく。間違いがあったらすぐ訂正する。

これが世の中の社会の生き方でありますから、一つの型にはめて、一つの答えがあつて、それで進んでおればよかつたという、西欧に追いつけ追い越せという我々が育つた時代のやり方は全く通用しなくなっている。我々の頃は西欧というモデルがありましたから、それを真似ていけば大体間違いがなかったわけではありますが、もうアメリカもヨーロッパのどの国も直面している問題はすべて違うわけで、この国民それぞれの対応している問題もそれぞれ違う。そういう時代に対応できる青年たちをどのように育てていくのかということが求められる時代に入っております。

少子化と個人主義について

そういう時代に入っていることはもう私から申し上げるまでもないのでありますけれども、これが大変に厄介なことには、一方でそういう非常に複雑になっている社会が進むなかで、少子化が進んでいる。この少子化というのは、これも私が申し上げるのも何ですけれども、教育の敵であります。

少子化というのは必然でありまして、大体2人ちょっと生んで、それが最後まで人生を全うするというのは理想的な社会でありますから、2人を切るのはまずいのですけれども、昔のような5人、6人生まれてというのではなくて、2人ちょっとぐらい生まれる社会になるということは社会の一大進歩で、少子化自体は広い目で見れば素晴らしい方向なのであります。少子化するというのは、人間が自分の意思でやるわけでありまして、神の意思ではないし、自然の意思でもない。人間の意思でやるわけでありまして。

この少子化しますと、1人っ子、あるいは2人っ子が普通になってくる。この1人っ子、2人っ子、あるいは3人っ子でもいいのですけれども、これが幼い頃から同年代、あるいは異年代のいろんな子どもたちと混じり合って育つという、これが人間の最も自然な育ち方でありまして。混じり合って育つておれば、それは少子化のマイナス点、教育に対する副作用はなくなるのでありますけれども、なかなか混じり合わない。

少子化が進むのと合わせて個人主義が進んでおります。それもいいことでありますけれども、個人個人がその家庭を単位として混じわらないという暮らし方が世の中で普通になってきますので、子どもというのは生まれて親に育ててもらった幼い頃、幼児の頃というのは大体親と2人である。特に日本の場合はいまだに男女共同参画が遅れておりますので、母親と子どもが昼間ずっといるという家庭がまだまだある。

これは母親にとっても悲惨であります。子どもにとってもまことに悲惨な事態であります。大の大人が幼児と1日中、他と交わることもなく暮らす、そういう異常な暮らし方に耐えられるはずがない。人間は交わって暮らす人間でありますから、可愛いけれども、対等に交わることのできない幼児と2人でいなきゃいけない。これはもう監獄みたいなものでありまして、実に母親に酷な状況であります。

一方、子どもにとっても実に酷な状況でありまして、子どもが大人とだけずっと一緒にいなければいけない。もう既に幼児期からにっこり笑いかけたり、他の子に興味を示したりしだす1歳、2歳、3歳、これは非常に社会性を伸ばすために重要な時期であります。この時期もほとんどの時間を大人と一緒にいて可愛がられるだけ。可愛がられるだけという非常に異常なペット状態で育てられている。これでまともに人間性が育つというのは考えられないので、これはもう指示を待ち、親に可愛がられ、言うことを聞いていけば生きていけるのだという考え方になってしまう。

これが、少子化が教育にもたらす最大の副作用でありまして、この点を早く取り除かなければいけないのでありますけれども、日本の場合はこの点の取り除くのが非常に遅れている。そのときにしっかり人格的な社交性、そして自立性が育っていないままに学校はそれを受け入れなければいけない。それが小学校、中学校でまだまだ修正されないままに高校で受け入れなきゃいけない。

高校における最大の課題

高校では知識を教えて、あとはもう子どもたちが自由に考え、自分で人格を切り開いていく、それが普通の教育として想定されている状況であろうと思いますが、その人格の発達が不十分なままに受け入れなければいけないから、高校は知識教育で、あと人格教育は本人たちにまかせる、仲間たちにまかせるというわけにはいかない状況になってきている。そこがずいぶん前からそうなっているものであり

ますが、そこが高校にとっても非常に大変なところであろうと思います。高校で総合学習の時間が取り入れられているのもそういう趣旨なのであろう。だから自分の科目だけ教えていけばいいというわけにはいかない。

そういう状況のなかでどのようにして人格教育を進めるのか。そういう課題はまだまだ重くのしかかっています。もちろん素晴らしい青年たちもたくさん育っています。それは本日ご参加いただいている先生方の子どもたちであって、ご参加いただいていない大多数の先生方のところで育った青年たちが高校教育の課題を果たせないままに社会に出てきて、そしていま社会に適応できない指示待ちの大人たちがたくさん生まれてきているという状況になっている。これをなんとかしなければいけないのであろうということであったと思います。

ですから高校時代、総合学習というのがあり、いろんな課外教育のなかでボランティア活動等々を通じていろんな刺激をしていただいて、自分で考えるように。自分で考えるということは自分を大切にすることです。自分を大切に、自分で考える、自分を持つように、そういう刺激を与え、そういう環境を高校でもつくらなければいけない。それをどうすればいいのか、それが最大の課題であろうと。

そういう刺激を与えるといいまでも、全くその目のないものに無理やり刺激しても、これは乗ってきません。高校時代の特徴はやはり自我に目覚める時期である。肉体的には大人になる時期であります。肉体的に大人になるあの思春期の時期に心も目覚める。親が絶対であり、社会が絶対であり、ルールが絶対であった、自分で主体性をもって考えられなかった子どもたちが、あの思春期、からだが大になる時期に心も殻がはじけて自分の目が出てきて、自分の目で考える時期である。その時期を捉えて刺激するということが大切だろう。

それはどう刺激すればいいのか。それはなぜかということ徹底的に聞くことではないかと私は思います。自分に目覚めるということは、あらゆる問題についてなぜかということ自分で考えるという人間になるということでもあります。フィンランドの教科書を私、見せてもらったら「なぜか、なぜか」。小学校の1年の教科書から「なぜか」をやっているのです、その時期から「なぜか」をやるのはいいことでもありますけれども、特にこの「なぜか」がいちばん大切なのは高校時代、思春期の生徒たちに対して問いかけることであろうと思います。

「あなたはなぜ生きているのか」

「なぜか」のいちばん基本は「あなたはなぜ生きているのか」、これが「なぜか」の基本中の基本であろうと思います。「あなたはなぜ存在しているのか」「あなたはなぜ生きているのか」。これは、答えはありません。答えはありませんけれども、この問題をどれだけ思春期のときに考えているかで、その人がどれだけ自分の見方を持ち、自分の人生の意味を自分で考える人間になっているか。

この「なぜか」のいちばん基本の問いをこの高校時代にぜひ通らせた。これは放っておいても通るはずであります。通るはずでありますけれども、横のほうへ引っ張り回してむちゃくちゃ覚え込ませたり、他のほうへ引っ張ったりしますと、その問いを深める余地がない。あるいは自分でITを持っていますから、そちらのほうに溺れ込んでしまえば、「なぜ自分は生きているのか」というこの問いは苦しい問いでありますから、この問いにしっかり取り組む余裕がない。これは環境としては最悪でありまして、いちばん人間の基本をつくり上げる時期を失ってしまうことになります。

ですから「なぜ生きているのか」「あなたの存在意義は何か」、これは高校時代から大学時代にかけて徹底的に考えるようにする。考えるのは自分であります。自分で考えなきゃいけない。それに答えが

あるのかという、これは答えがない。答えを求めてきても答えない。苦しくてもしっかりこの問いを持ち続けさせるという環境をつくる。このことが思春期の教育のなかでいちばん基本的に大切なことなのだろうと思います。

この「なぜ自分が存在しているのか」「自分の存在意義は何なのか」ということを徹底的に考えることは自立に通じます。自分が生きているという意義を肯定できる人間になるということは、つまり、自分が主体的に自分として生きていかなきゃいけないんだということを自覚するわけでありますから、これは自立に通じる。

この自立するということは社会に出ても、いろんな問題を自分の視点、自分の考え方で考えるということであり、むずかしい問題が出て自分でも解決する。最後は自分でやらなきゃどうにもならないという、そこをしっかりと自覚するというそこに通ずる。だからこの問いは非常に重要な徹底的に考えさせなきゃいけない問いなんだと思います。その問いについていろんな答えがありますが、どうしても見つからない人は自殺するということはあるでしょう。なんとか見つけた人はその確信を深めながら自分の能力を広めていく、自立していく。

そして自立するということは自信をもつということなんだろうと思います。自分に自信が持てる。どんなつらいことに遭っても、失敗しても、自分の存在意義が肯定されているかぎりは「よし、もういっぺん自分は取り組もう」という意欲が持てるということであろう。

それと同時に自分の力を、限界を知ることでありますから、人の力を認め、人と協同してやっていかないと自分はしっかり生きられないのだということを知っていく。そういうふうにつながり、自助の意欲につながり、助け合う共助の意欲・能力も深めていく。そのいちばん基本の問いの「なぜあなたは生きているのか」の問いを徹底的にこの時期に突き詰める。答えはありませんから教えることはできません。そういう環境が高校時代は非常に重要であろうと思います。

もう少しまとめて言いますと、自分の存在意義を徹底的に突き詰める、その過程で自分の能力を確かめ、「自分は自立していかなきゃいけない。自分が生きていかなきゃいけない」ということを自覚する。その自覚が持てると、それが自信につながる。そして自分の能力を発揮しようとする、人と協力してやっていかなきゃいけないということがわかり、協力の仕方も自ずといろいろ学び、人間性を深めていく。そういう過程で発展していくのではなかろうか。そのいちばん基本の時期がこの高校時代になるのであろうと思います。

私の高校時代

私自身の高校時代を顧みましても、私の時代は戦後間もなくの時代ですから、戦争から帰ってきて人の命を命とも思わないようなひどい先生方が結構いた。生徒をぶん殴るのが普通の時代でありましたけれども、そういうなかでもいろいろ悩んでいる先生がいて、私に最も深い影響を与えた先生はいつも「自分はなぜ教えるのであろうか」という問いを持っておられた。私はその先生の生物学の教科を習いましたが、「自分はなぜ君たちに教えているのであろうか」と教壇の上で悩んでおられました。滑稽といえば滑稽でありますけれども、本当にもう心の底から悩んでおられました。

その先生がいちばん私は素晴らしく、好きでありました。「どう教えればいいのか。自分は教えて君たちにどういう成果を与えればいいのか。しかし、君たち自身はなぜそこにいるのか」。そういうことをいつも悩みながら考えながら教えておられましたので、ジグザグしたり、黙り込んだり、そういう授業でありまして、本当にこれ、身についておまして、素晴らしい先生だったと思います。別にそういうふうにご自身が改めて悩んで下さいとは申し上げませんが、どうぞ高校時代の子どもたち、生

徒たちの人間性というのはいちばんその基本のところから始まるのかなということを申し上げました。

ボランティアの教育的効果

そういうことを悩むなかで、その答えを感覚的にいちばん手っとり早く生徒たちが習得する方法があります。それがボランティアです。どの先生もボランティアする人間に育てようとは思っておられないので、自分で稼ぐ人間に育てる。就職して自分で稼ぐ、自立のために教育するという、それが教育でありまして、ボランティア自身は自分でそれで生きていけるということではありませんから、教育の第一の目的にはならない。

しかしながら、儲からない、人のためにやるというこの活動は人と人とのつながりを実感させる。そして人が喜ぶということがどういうことか、自分が人の役に立つということがどういうことかということを、これは理屈は抜きで感覚的に実感させるのに最も適しております。人が喜んでくれる。「ありがとう」と言ってくれる。

人から「ありがとう」と言われて不愉快になる人は絶対にいないわけであります。なかには照れくさがり屋がおったり、ひねくれ者がおったりして、「ありがとう」と言われると渋い顔をしたり、そういうのもありますけれども、その人も心のなかでは人に感謝されることは嬉しいわけで、これはもう人間の本性、あるいは生物の本性と言ってもいいのかもしれない。本性でありますから絶対に嬉しい。理屈は要りません。なぜ生きているのか、いくら頭で考えてわからなくても、人に役立つことをして人から「ありがとう」と言われたら嬉しい。

その嬉しいということは「ああ、自分が生きているということはいいことなのだ」ということを理屈抜きで実感している。そういうふうにと人と人の絆、そして人に役立つということはそういうことを理屈抜きで実感させる大きな力を持っているわけで、人のために立つ活動を自発的にやるということ、教育的にはまさに最も簡単な、直接的にその本人の生きている意味を実感させるという効果をもっております。

非行少年の社会奉仕

実際、非行少年たちを、これはボランティアではありません、社会奉仕ですね、無理やり連れていくわけですからボランティアではないのですが、例えば保護観察中の非行少年たちを特養老人ホームに連れて行って高齢者たちに食事を出すとか、いろんなお手伝いさせるプログラムがあります。これが、非常に効果がある。

大体、この少年たちは自分が生きていることに意味を感じられない。学校の競争に敗れ、親からも疎んじられていると思い、だめな人間だと思って死にたいと思う。死にたいけれども、そう簡単には死ねないので、それなら悪いほうで目立って、悪いほうで自分の存在価値を見つけてやろう。これが非行少年たちの最近の多いタイプです。

悪いほうでも自分の存在価値を見つけないかと思っているわけですから、そういう少年たちに「なんで悪いことを。人に迷惑かけているということがわからんのか」という説教を大体やるのですけれども、そういう説教はぜんぜん聞かない。人に迷惑をかけたくてやっているのだから、人に迷惑をかける力があるということを確認したいためにやっているのだから、「おれがそういう迷惑をかけたくてやっているということが、おまえ、わからないのか、教官のくせに」と腹の中ではそう思っていますから、説教したってぜんぜんこれ、聞かないのですね。

でも、本当はその悪いほうで人に認められるというか、嫌がられるというか、それよりはいいほうで

やはり認められるほうが嬉しいわけでありますから、ボランティアとしてではなく、まさに無理やり奉仕のために養護老人ホームへ連れて行って、高齢者たちの世話をさせる。

お年寄りたちに「ありがとう」と言ってもらう。これは自然に言ってくれます。本当は事前に頼んであるんですけども、「まあ、いろいろやってもらったら『ありがとう』と言ってよね」と。これはおやすいご用です。いろいろと珍しい少年が来てやってくれるわけですから、「ありがとう」は簡単に言ってくれますが、この「ありがとう」が本当に効くのですね。

それまでは何言ってもわかっていない、聞いていないその少年たちが「ありがとう」と言われたことによって、「ああ、自分は人の役に立つんだ」ということを自覚する。その教育効果は非常なものがありまして、もうその一瞬で変わる。それでも変わらない非常に歪んだものもありますが、それでも何回かそれをやれば変わる。これは他のどんな少年院の教育よりも有効です。「ああ、自分が人の役に立つのだ。自分は存在意義があるのだ」ということを肯定できれば「じゃ、いい子になってなんとかやっついていこう」と変わってくれる。

またこれを親が「おまえは新聞に載った子だ」とただめにするのでありますけれども、それでも一瞬で変わってくれて目覚めた少年たちはあとはもう変わりません。しっかりと反省して、本当に他のぼんやり育った少年よりはずうっとずうっと強い、しっかりした、いい、強い人間に育ってくれます。それは強制的に奉仕活動させるわけですが、それを一旦いいとわかると、教育としてそういう奉仕活動をして奉仕活動の喜びをわからせると、そのあとは自発的に特養へ行ってそういう活動をやったりする。これはボランティア活動ですね。最初は強制的にやった教育活動ですが、本人が目覚めると、同じ活動もボランティア活動としてやるようになる。そうなると、本当にもう強い。後戻りいたしません。

そういう強い力を持っておられますので、ぜひそういう人の役に立つという活動を体験させて、それもできればなるべく仲間と一緒にやることによって、一緒にやる協力の仕方、自分の能力の生かし方等々を体験して目覚めてもらう。そういうことをこの高校の期間にできれば素晴らしい、指示待ちでない積極的に社会の問題に取り組む青年たちが日本に溢れることになるだろうと期待しております。

ご清聴、感謝いたします。ありがとうございました（拍手）。